

Decorative tiles Product of Tokoname

とこなめ陶の森 資料館 企画展

常滑の 装飾 タイル

そうしよく



2022.7.30 sat - 10.30 sun

とこなめ陶の森 資料館 9:00~17:00

休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）入場無料

常滑造形集団とパブリックアート

講師 | 吉川正道さん (美術陶芸家)

日時 | 8月6日 (土) 13:30 ~ 15:00

会場 | 資料館 2階 講座室 定員 | 40名 予約不要

装飾タイルは、建物の外装や床材だけでなく、パブリックアートと呼ばれる美術作品にも用いられています。パブリックアートとは、公共的な空間に設置される美術作品 (表現) のことです。

常滑でみることができる作品は、常滑造形集団が手掛けた大阪万博出品の陶製ベンチ、建物の魅力を高める陶壁などがあります。

講演会では、常滑造形集団に関わった吉川正道さんに、「土」文化とパブリックアートへの思考を講演していただきます。



撮影：サラ・ベッツ



国際芸術祭「あいち2022」連携企画事業

あれもこれもタイル100年

わたしたちの生活のなかで、なくてはならないやきものの一つにタイルがあります。タイル (tile) の語源は、ラテン語の「テグラ」という言葉からきており、「物を覆う」という意味があります。つまり、建物の屋根や壁、床を覆うやきものは、すべて「タイル」ということになります。

日本で最初にタイルが登場したのは、6世紀後半の飛鳥時代のことです。朝鮮半島から仏教、寺院建築の造宮技術が伝来し、「屋根瓦」、「敷瓦」、「腰瓦」が作られるようになりました。古代の瓦は知多半島でも見つかっており、知多市にある法海寺や美浜町にあったとされる奥田廃寺が挙げられます。また、平安時代末期に築窯された東海市の社山古窯や常滑市の上白田古窯など複数の古窯から瓦が出土しており、中世の頃最も盛んに瓦を生産していたことがわかっています。中世古窯から出土した瓦は、自然釉のかかった高品質なもので、京都の寺院や皇族の建物に使用されました。



社山古窯の瓦 平安時代末期



常滑美術研究所 陶板 明治時代



クリンカータイル 大正時代

私たちが慣れ親しんでいる名称の「タイル」は、明治時代初期になると使われるようになりまし た。それは神戸や横浜に外国人居留地が設けられたためです。彼らの住んだ建物の暖炉まわりには 「腰瓦」、床には「敷瓦」といったタイルが使われていました。また、鉄道や下水道などの都市整備が進むにつれ、「躯体煉瓦」、「化粧煉瓦」の生産が全国的に行われるようになりました。

近代においては、古代から使われていた名称や使用する場所に合わせて25種類以上のタイルの名称がありました。そのため、名称から起きる混乱とタイルの形状や寸法を統一する必要性が生じて きました。この問題は、100年前の1922（大正11）年に開催された「平和記念東京博覧会」で、「タイル」という名称に統一され、タイルの規格化も進みました。しかし、実際にタイルに関わる 人には、名称が統一されたことで、外装に使うタイルなのか、床に使うタイルなのかわかりづら くなるというデメリットも生じました。現在では、「外装用タイル」、「スクラッチタイル」、「ジュエルタイル」となど用途や形状を表すタイルの名称が使用されています。



テラコッタタイル 大正時代



陶製門柱飾 大正～昭和初期



陶製柱頭 昭和初期

常滑の装飾タイル

常滑でのタイル生産は、明治時代中頃から始まり、鯉江方寿こいえほうじゅが開設した常滑美術研究所がきっかけとなりました。その頃の常滑は、甕かめや壺つぼなどの大型製品や土管の生産が盛んで、町のいたるところにやきものを積み重ねた風景をみることができました。鯉江方寿は、父の方救とともに常滑で最初に登窯を導入した人物で、「常滑陶業の陶祖とうそ」と呼ばれています。また、愛知県で最初に「躯体煉瓦せんくつてき」をつくった先駆的な陶業家でもあります。

方寿は、美術性・国際性のある常滑焼をつくるべく、工部美術学校を卒業した内藤陽三ないとうようぞうや寺内信一てらうちしんいちを教師として招き、常滑美術研究所を開設しました。その当時つくられたタイル類には、透かし彫りのある陶板やクリンカータイルなどがありました。陶板は、鯉江方寿の墓標に使われています。

明治 30 年代後半になると、海外で建築を学んだ建築家によって、「テラコッタ」と呼ばれる国産のタイルを使用するようになりました。陶業家の久田吉之助ひさだきちのすけは建築家の武田五一たけだごいちに依頼されて、黄色被覆煉瓦おうやテラコッタを手掛けました。そのタイルは、京都府立図書館、岐阜県岐阜市名和昆虫記念館なわこんちゅうなどで使われました。



杉江製陶所 美術タイル 昭和時代初期



杉江製陶所見本室床タイル

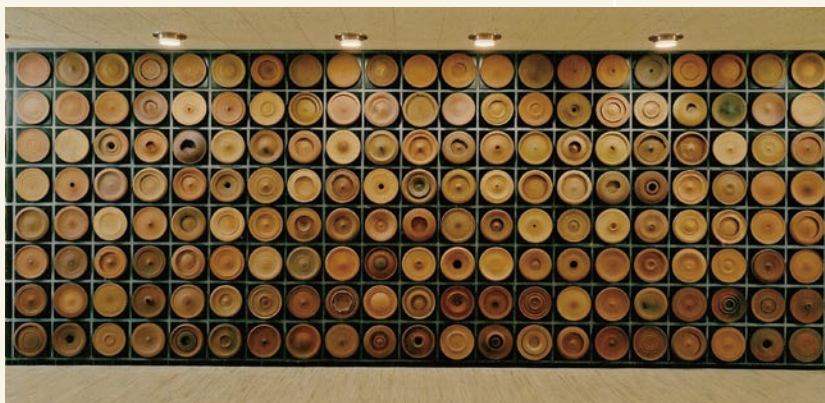
大正時代から昭和時代初期にかけて、大学や官公庁、ホテルなど鉄筋コンクリート造建築が主流となっていきました。このときに、躯体（建物）に煉瓦を使う建築から、コンクリートを保護するための表面仕上げ材としてタイルを使う建築へと変わっていきました。「タイル」の名称が統一された時代でもあり、建物の壁に張る「外装タイル」、床に張るクリンカータイル、柱や照明などを飾る立体の大きな「テラコッタタイル」なども生産されるようになりました。常滑のタイルが使われている有名な建物では、帝国ホテル旧本館（犬山市に移築）、東京大学安田講堂、愛知県庁舎などが挙げられます。また、常滑の杉江製陶所とうようこうぎょう（現東窯工業）では、色彩が豊かで高品質な「美術タイル」がつくられていたことがわかりました。製陶所内の見本室に残されていた腰壁及び床タイルをみると、釉薬研究の最先端であった京都の技術と同じ高い水準に達していたことが想像されます。しかしながら、重厚感じゅうこうかんのある「テラコッタ」や装飾性の豊かな「美術タイル」は、ぜいたく品とみなされ、戦時中にその役割を終えることになりました。戦後は、工業製品として大量生産ができる、精度の優れたすぐタイルが求められるようになり、安定した品質を保つ「外装モザイクタイル」が流行しました。

昭和 30 年代後半以降、常滑の陶芸家によって、「パブリックアート」の一つである「陶壁」が手掛けられました。「パブリックアート」とは、公共的な空間に設置される美術作品（表現）のことです。

常滑では、庁舎や学校などの公共施設、駅や空港などに陶壁が設置されています。旧常滑市役所には、稲葉実や杉江淳平の手掛けた陶壁があります。稲葉実の陶壁は、黒い陶板「方」に、ロクロによる円盤「円」が張られています。ひとつひとつの「円」は、常滑市民ひとりひとりの情感を示し、広がる全体の「円」は常滑のエネルギーを象徴した作品です。稲葉や杉江らは陶壁の制作以降、「常滑の土で何が表現できるか」を模索し、大阪万博で陶製ベンチ 100 点を出品しました。その後、彼らを中心に「常滑造形集団」が発足され、常滑西小学校の陶壁をはじめ、大型のオブジェ作品を次々と手掛け、土への思考を重ねていきました。グループの活動は残念ながら短いものでしたが、常滑のつくり手たちが大きく成長し、陶板を用いた作品が作られるきっかけとなりました。

2022 年に移転した常滑市役所庁舎には、水野太史らによってつくられた陶壁があります。彼らの作品には、常滑の原土と釉薬が用いられ、常滑における土の歴史や風土、精神が表現されています。陶板の断面がノコギリの刃のようにギザギザに加工されており、市役所に入る時と出る時では、異なって見えるように工夫されています。この仕掛けによって、「常滑の過去、現在、未来」がつながるように印象づけられ、常滑の土の魅力を最大限に引き出しています。

(とこなめ陶の森 小栗康寛)



稲葉実の陶壁

『「方」と「円」の構成』
昭和時代



水野太史らの陶壁

『常滑、太古から変わらぬものと、
受け継がれてきたものと、そして未来』
令和時代



加藤美土里 陶板
昭和時代



吉川正道 陶板
平成時代



吉川千香子 陶板
平成時代



伊藤雄志 陶板
令和時代